

読書に関するエッセー 入賞作品集 2018

《一般成人の部》最優秀賞

祖父の本棚

的場大地

祖父が亡くなった。

今年の四月の事だった。まだ、うっすらと寒さが残る朝、突然、発作を起こし倒れ入院した。二日後に意識が戻った。意識が戻ってから祖父は、まわらない舌でしきりに家に帰りたい、帰りたいと言うので私達家族は困った。

それから一週間もしない内に祖父は再び発作を起こし、意識を失った。今度は一度も目を覚まらず、そのまま息を引きとった。

昔から私にとって祖父は怖い人だった。畑仕事で真っ黒の肌。よく通る大きな声。我が強くあけすけにズバズバと物言う性格。私含め家族全員と正反対だった。

そんな祖父は、頻繁に父や祖母と些細な事で言い合い怒鳴り合っていた。そして決まって「家から出ていけ」と言った。私はそれが嫌で嫌でたまらなかった。だから私は、大学は実家を出て地方に進学した。そして就職のため一時的に実家に身を寄せていた時に祖父は亡くなった。

それから葬儀が済み、一通りの落着きを取りもどした頃、私は祖父の本棚の整理をまかされた。祖父の本棚はそれ程大きくなく横80cm、縦100cmと本自体も五十冊あるかないかの量だった。収められている本も、歌うのが好きで農作業一筋だった祖父らしく、演歌や歌謡、農業に関する本が半分を占めていた。残り半分は小説や詩集など様々であった。

私は祖父が読んでいた本が気になる、時間があれば祖父の本を読むようになった。

祖父の小さな本棚は祖父のこだわりや人生を濃縮しているかの様だった。詩集は自然や花、動植物、そしてそこに生きる人々の姿を素朴に描いたもの、地元やかつて旅行した地域をテーマとした小説や写真集。農業の本も祖父が今まで作ってきたナスや米、大根のページは何度も読まれたであろう跡がついていた。

私は読書をする内に、私が幼い頃、祖父に本を読むために本

屋や図書館に連れて行ってもらった事を思い出した。

私は、以前から怖いと感じていた祖父を読書を通じ、祖父が見てきたもの、感じた事を少しながらなぞる事でずっと身近に感じた。その時私は改めて祖父が亡くなった事を自覚し泣いた。

《一般成人の部》優秀賞

人を育てる読書

海星高等学校 二年

横山晃大

読書をする、人はどうなるでしょうか。楽しんだり、納得したり、知らなかったことを知ったりするのは、副次的効果に過ぎないと私は考えています。

では、読書をする、人はどうなるのか？成長です。人は、本を読めば読むほど、育つてゆくと思うのです。無論、肉体的成長ではなく、心の成長です。

たとえば、小説を読むとき。私は、登場人物の喜怒哀楽を文面から察し、そして彼らへと「感情移入」します。会った事も話した事も無い相手の心を察し、時に怒り、感動し、悲しむ。そうする事で私は、より物語

私は読書とは対話する事だと思ふ。様々な時代、地域の人、全く自分と違う世界、思考に繋がる事ができる。それは著者や読者との間のみならず、読者間同士でも伝え合い、繋がっている事だと思ふ。私は今日も読書で新しい事を学び気付き、そして繋がっていききたい。

に深く入り込み、小説を面白い、と感じるのです。それが、人の心の成長へと深くかわわっているのではないかと考えました。

「感情移入」は、何も小説の登場人物にだけ行えるわけではありません。現実存在する人にも、私は「感情移入」できます。

小説のように文字を読み取る代わりに、相手の顔から、動きから、しぐさから、声色から、私は相手の心を読み取る事が出来ます。無論細かな心情まで読めるようになるのは難しいですが、それでも相手が、今どういう気持ちでいるかわかるようになるのです。

するとどうなるかといえば、

人は優しくなります。人の心を知り、そして自分のことのように考える事で、相手のことを考えて行動する事が出来るからです。人に優しくなれるというのは、心が成長している証ではないでしょうか。いわば、情緒力の上昇です。

昨今、インターネットは普及しました。連絡手段も発達し、技術は先鋭化していき、私達は不自由を感じることはほぼありません。

しかし、便利になりすぎた社会で、効率ばかりを求めて、私達は大事な心の成長を置き去りにしてしまっていないでしょうか。私自身、大事にしてきた

かと思われれば、そうではないと答えるでしょう。私も、現代に生まれた人間の一人ではないからです。

だからこそ、私達は一度立ち返るべきなのかもしれません。本を読み、人の心を思い、感じる力を養わなければならないのかも。しかもそれは、強制ではなく、自分から本を読みたいと思うことが大事なのです。

つい最近、私は小説を読み、そして書くことで、それをようやく理解できました。

読書だけで世界が変わるわけではありません。ですが、読もうと思いついて読書をした様々な人間の中にある世界を、少しでも変えてくれることだろうと

《一般成人の部》優秀賞

私の読書法

亡父が誘った「愛読新ジャンル」

谷 篤

蔵書約七百冊の熟読に挑戦することを決めたのは、昨年八月だった。二十二年前に他界した父の愛蔵品だ。私が会社で定年を迎え時間にゆとりが生まれたのを機に、遺品整理を始めた。「遅過ぎるよ」と苦笑する面影を想像し後ろめたさを抱きつつ、書物の確認と片付けに取り掛かった。その中で約五百冊を占める推理小説が、私の新しい読書ジャンルと読書法の発見に道を開いてくれた。

手に取って謎解きの難しさを宣伝文句に据える裏表紙の言葉に引き込まれた。さらに、「常にあなたに楽しい憩いと安らぎを贈り、明日の創造の糧となり

思っています。

人は本を書き、本は人を育てます。そしてより良い本が書かれ、より良い本はより良い人を育てる。本はそうして循環し、読書という文化もまた、そうして洗練されるのです。

人生最高最良の伴侶となるよう、心を込めて編集しました」とうたう出版社の心意気を読者へ直球で投げ込んでくる。父が実感した読書の妙味を息子が同じように共有することも一つの供養になるのではないか。そんな思いを持ちながら、人気作家十数人の力作を読み始めた。

発行年は昭和五十年代前半からの約十年間に集中している。父が地方公務員を退職し第二の職場に勤めていた時期と符合する。自分だけの世界に入っている耽読はバス通勤の時間を利用したオアシスだった。

私が読み始めて戸惑ったことがある。活字の小ささだ。最も

古い五十一年発行の推理小説で、一ページ当たり千四百四十六字詰め込まれている。その十年後の単行本は七百九十二字。最近購入した文庫本は六百六十三字とぐっと縮小してきた。読みやすくなっている歩みを追える。

しかし、細かな活字配列はすぐに慣れていった。息もつかせないストーリーの展開に目を奪われていく。胸踊らされるシーンが一定のページごとにやってくる。結末を早く知りたいと焦り夢中にのめり込んでいく。未知の読書分野で味わう快感だった。読書本来の楽しさを四十年前の小説から授けられたのは父に感謝すべきと、ふっと思った。

という刑事の言葉。昭和五十年代での女性の平均寿命は七十歳代後半だった。昨年の八十七・二六歳とは約十歳の隔たり。人々の意識の中でも六十歳を超えれば老人と見るのが普通だったようだ。気候に関する表現でも今昔の感を抱く。「七月の最後の週から八月上旬にかけては本土を狙う台風もない」と語るシーンがあった。夏台風が続々と襲う現代への変貌ぶりを再認識できた。

父との読書共有体験は百冊を超えた。おやつと思わされたのは、本に挟み込まれた購入レシートが多さ。二十冊ほどにそのまま残り、しおり代わりに使われていた。四十年前のレシートの購入日・金額・書店名が色あせずくつきりと残っている。

《一般成人の部》優秀賞

忘れ得ぬK先生

忘れ得ぬ『武蔵野』

谷 口 訓 子

中三に進級したばかりのある日、担任のK先生が「君たちは

本一冊だけ持参して無人島に行け、て言われたら何を持って

く？」と問うた。『一握の砂』赤毛のアン』『シャーロック・ホームズ』……と、皆口々に答えて、室長に片想い中の私は『ハインエ詩集』と答えた。「先生は理科の教師やから『昆虫記』でしょ」と生徒が問うたところ、「僕は国木田独歩の『武蔵野』を持参します」と。「エッ、ドッポ？誰それ？」誰も知らない作者だった。僕はこの作品に出会った時の感動を忘れません。君たちには少し難しいかもしれないけど、いつか必ず読んで下さい」

帰宅して本棚にあったそれは短い作品であった。が、私は失望した。漢字ばかりで景色のことを「ごちゃごちゃ言うて、心ひかれへんなあー」というのが正直な感想であった。

翌年二月、K先生は交通事故に遭われて入院された。「高校入試が終わる頃には退院される、今は入試に全力投球すべきやから、お見舞いに来なくて良いっておっしゃってる」と臨時担任M先生が言うので、私たちは手紙と千羽鶴を託したただけだった。ところが二月末、緊急の朝会で校長からK先生が亡くなられたことを知らされた。「事故後ずっと意識不明やった。時々うわ言で生後三ヶ月の坊やの名と、B組52名の生徒を出席順に点呼していたらしい。お前たちを動揺させてはあかん、と

よって自然が身近なものになった。『鳥の羽音、轉る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。』体言止めから、力強さ、歯切れの良さが伝わり、余韻・余情をかもし出してくれる。この短い作品には武蔵野をとりまく自然と中に居る人間をあます所なく描写されている。この作品を理解するには『林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想す』ることのできる目と耳と心を持たねばならない。中学生ではどだい無理なことだった。私も大人になって、鈴鹿の山々や三滝川に毎日違った表情があることを知った。

作者の考え方などが登場人物の性格に反映されているところが面白く感じるころがあった。十四歳の今は、『宇宙に命はあるのか』という本を読んでいる。宇宙探査について書かれた本だ。この本は、NASAの火星探査機の開発を行っている人が書いている。僕は特に地球外生命体に興味をもった。地球外生命体を探す計画には、誰でもできるSETIというものがあり、やってみようと思うきっかけになった。

高三の現国の教科書に『武蔵野』の一部が載っていた。教師は38歳で夭折した独歩の略歴、他の作品、当時の武蔵野を説明し、「今から各自大きな声で三回読め」とだけ言って授業は一語丁寧に音読した。『檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がささやく。風が叫ぶ。』流麗な、漢文調の文章が心地よく耳に響いた。時雨や風を擬人法で表現することに

思えばK先生は四季折々の花や雪の結晶を見せてくれ、自然と共に生きておられたのだ。私にとつてK先生は忘れ得ぬ人であり、『武蔵野』は忘れ得ぬ大切な一冊となった。

僕にとって読書とは、空気だ。図書館や書店に行くと、いつも本を手にとって、時間を忘れて読んでしまう。本を買ったときや借りるときも、どれに迷ってしまいい、決めるのに時間がかかってしまう。家にいようが学校にいようが暇さえあれば手にとつて読んでしまう。本は、なくても死にはしないが、生きている気がしないと。本は僕に知識を授けるときもある。時には、人間として必要なことを教えてくれたりもする。自分では考えられないよう

本を取り出して破ったりかじったりした。そのせいで今、その本には、テープが何か所もはつてある。

僕にとって読書とは、空気だ。図書館や書店に行くと、いつも本を手にとって、時間を忘れて読んでしまう。本を買ったときや借りるときも、どれに迷ってしまいい、決めるのに時間がかかってしまう。家にいようが学校にいようが暇さえあれば手にとつて読んでしまう。本は、なくても死にはしないが、生きている気がしないと。本は僕に知識を授けるときもある。時には、人間として必要なことを教えてくれたりもする。自分では考えられないよう

《中学生の部》最優秀賞

読書は僕の無限の宇宙

三滝中学校 三年

岡 島 唯 希

僕の本との出会いはかじることから始まった。僕が生まれて三カ月の時、読み聞かせをして

もらっていた。その絵本の名前は、『ももこもこ』。はいはいができるようになると、好きな

十二歳になった頃には、小説を読み始めた。イギリスのJ・K・ローリングが書いた、『ハリー・ポッター』シリーズの作品が特に好きで、何度も読んだ。『三国志』や『光圀伝』などの歴史小説も読んだ。小説は、幼い頃から読んでいた図鑑と違って、

作者の考え方などが登場人物の性格に反映されているところが面白く感じるころがあった。

僕にとって読書とは、空気だ。図書館や書店に行くと、いつも本を手にとって、時間を忘れて読んでしまう。本を買ったときや借りるときも、どれに迷ってしまいい、決めるのに時間がかかってしまう。家にいようが学校にいようが暇さえあれば手にとつて読んでしまう。本は、なくても死にはしないが、生きている気がしないと。本は僕に知識を授けるときもある。時には、人間として必要なことを教えてくれたりもする。自分では考えられないよう

な新しい見方を示してくれることもある。つまり、本は無限大の可能性を秘めている。僕はこ

れからも読書というものを大切にし、楽しみたいと思う。

《中学生の部》優秀賞

私と本

港中学校 一年

吉田 菜月

私は読書好きの友達に影響されて読書に興味を持つようになった。小学校中学年の頃は読書をする時間があつたのにだらだらしていた。しかし、小学校

六年生のときに友達と同じクラスになり、その読書愛に驚かされた。いい刺激になった。それからいろいろな人におすすめの本を聞いたり、読書の世界にのめり込んでいった。今年、私は「一年間で本を八十五冊読む」という大きな目標を立てた。そして、物語だけでなく、説明文にも少しずつ慣れていくことも

思った。私はスマートフォンを持っていない。周りの友達がスマートフォンを持ち始めているので少しあせっていた。

最近「活字離れ」とよく聞く。幼少期からテレビやスマートフォンを使っていると起こる

む。

私は本を読んで成長した。

帰国子女である私は、小学校低学年の頃は英語の本しか読まなず、日本語に触れても簡単なものばかりだった。だから帰国したときは日本語がちぐはぐで文章もうまく書けていなかった。しかし読書を始めて、正しく助詞が使えるようになり、会話もスムーズにできるようになった。親からの指摘も減った。さらに、本を通してたくさん

の人の生き方に触れた。現代人の物語が好きだったが、昔の話にも少しずつ手を伸ばすようになった。名作にも興味がわいてきた。幅広いジャンルの本を読んでいた。今、『吹部！』という本を読んでいる。自分の部活動に活かそうだったから見つけた日に買ってしまった。また、『みかづき』という本も読んでいる。戦後の塾ブームについて書いている本で、今まで「古くさそう」と思っていた現代以外の時代の本へのとびらとなりそうだ。

私にはまだまだ本をたいらげるエネルギーが残っている。今、たくさん知識を吸収できる今だからこそ、本で知ったことをぐんぐん吸い上げていきたい。今、学んだことは将来必ず自分の役に立つと信じて私はこれから本を読む。

《中学生の部》優秀賞

『夏の庭』との出会い

港中学校 一年

鶴田 紘人

ぼくがよく読む本は、アニメや映画のノベライズ本である。ぼくは正直言って、あまり読書が得意ではない。特に小説は文字を追うのに精一杯になってしまふ。だから一度見たことのあるアニメや映画のノベライズ本だと登場人物や物語の内容が頭の中で描きやすく、とても読みやすいところが好きだ。

中学生になってから、毎朝十分間の読書の時間がある。ぼくはもっぱらノベライズ本を読ん

で過ごしていたのだが、しばらくすると自分の本棚にある本をすべて読み切ってしまった。部活や塾、母の仕事の都合もあり、なかなか新しい本を買いに行く時間もないまま数日が過ぎ、もう一度同じ本を読み返そうかと思っていた矢先、兄の部屋の本棚に数冊の文庫本を見つけた。

五歳年上の兄も中学生の頃、朝読書があり、その時に読んでいたものが本棚に残っていたのだ。ぼくはその中から何気なく薄くて読みやすそうな一冊を手

に取ってみた。それが湯本香樹

実の『夏の庭』という本であった。この物語は木山、河辺、山下という小学六年生の仲良し三人組の少年たちが、山下がおばあさんのお葬式に参列したことをきっかけに、死んだ人を見てみたいという奇妙な好奇心にかられて、町外れの古い家に住むひとり暮らしのおじいさんをこっそりと観察するところから話は始まる。やがて人や社会を遠ざけ、死んだように生きているおじいさんとの交流が始まり、お互いに心を通わせていく。

おじいさんの「死」を発見すること、彼らのひと夏の不思議な関係は終ってしまうのだが、その「死」は、けっして最初にいだいていた好奇心を満たすものではなく、少年たちの心に深い悲しみを残していった。おじいさんの体も一生懸命に手入れをした家も一緒に種から育てた庭一面のコスモスも形あるものは全て、おじいさんの死後